

令和4年度 信濃教育会教育研究所

研究発表会のご案内



期日・日程

- 東北信A会場（担当：更埴教育会） 6月18日（土） 千曲市立 東小学校
- 東北信B会場（担当：長野上水内教育会） 7月 9日（土） 長野市立 南部小学校
- 中信会場（担当：木曾教育会） 7月16日（土） 木曾町立 日義小学校
- 南信会場（担当：下伊那教育会） 7月23日（土） 飯田市立 伊賀良小学校

9:00

9:15 9:20

9:35 9:45

12:15

受付

全体会

分科会

学び合おう 子どもの目線から

この研究発表会は、研究所で学んだ第74期研修員が研究成果を報告する会です。報告をきっかけとして、参会の先生方と共に互いの実践を交流し合い、子どもの目線から授業のあり方を求め合う会でもあります。

改めて教師のあり様が問われている昨今、学校での実践にゆらぎが懸念される昨今、私たちは何を見据えて実践に取り組んでいったらよいのでしょうか。皆さんと共に大いに語り合えたらと願っております。ご参加をお待ちしています。

第74期研究テーマ

第1テーマ 教師と子ども、子ども相互の関係づくりをどうすすめるか

第2テーマ 子どもの学びをどのように充実させるか

第3テーマ 子どもの願いに立った授業づくりをどうすすめるか

発表者と個人テーマ

(発表要旨は次ページ以降をご覧ください)

第1分科会	第1テーマ 「子どもの思いを問い続け、その思いに向き合う教師」 中山 弘樹 (長野市立中条小学校)
	第3テーマ 「子どもが自らこだわって追究する姿を支える社会科の教師を目指して」 北沢 賢悟 (塩尻市立丘中学校)
第2分科会	第1テーマ 「その子のよさを実感し、行為に込められた思いに寄り添える教師」 畠山 哲 (長野市立吉田小学校)
	第2テーマ 「子どもが自ら学ぼうとする姿に目を向け、共に追究する教師」 高橋 美嘉 (佐久市立泉小学校)
第3分科会	第2テーマ 「子どもの求めていることを感じ、追究を支える教師を目指して」 前田 全俊 (佐久市立岸野小学校)
	第3テーマ 「子ども一人一人の『わかりたい』に目を向けられる授業を目指して」 馬場かおり (佐久市立岩村田小学校)

分科会担当推進委員と司会者

	東北信A会場 推進委員・司会者	東北信B会場 推進委員・司会者	中信会場 推進委員・司会者	南信会場 推進委員・司会者
第1分科会	栗林 幸治 (南牧南小学校)	齊藤 隆 (栄小学校)	佐々木 英明 (麻績小学校) 手塚 俊彦 (木祖中学校)	井口 博司 (本郷小学校)
第2分科会	宮下 聡 (和小学校)	西澤 真一 (森上小学校)	山崎 光信 (穂高南小学校) 出口 哲朗 (小谷中学校)	小出 豊 (富県小学校)
第3分科会	山崎 俊子 (千曲市立東小学校)	佐藤 俊彦 (大岡小学校) 湯本 文洋 (山ノ内町立東小学校)	松田 真理 (芳川小学校)	宮澤 昭二 (清内路小学校)

申し込み 案内

5月19日(木)までに学校を通して、各郡市の教育研究所運営委員へお願いします。
(各郡市の教育研究所運営委員は、上記に記載の推進係及び司会者の方々です。)

第1分科会

■子どもの思いを問い続け、その思いに向き合う教師

中山 弘樹 (長野市立中条小学校)

A児は衝動的な言葉や行動が多く、友だちとのトラブルが絶えない児童でした。「トラブルの原因はA児にある」と思った私は、A児に細かなルールや約束を提示したり厳しく指導したりしてきました。しかし、私の指導ではA児の行為は改善されませんでした。それは、私がA児の行為の改善ばかりを考え、A児の思いに目を向けようとしなかったからだと気づきました。

保育園実習では、年中組のB児と一緒に夢中になって遊ぶなかで、B児は自分の思いと一緒に感じてくれる相手を求めているのだということを実感しました。2年次研修で出会ったC児は、給食準備の時間に友だちが準備を終えて並んでいるのにもかかわらず、本に没頭していました。なぜC児が本を読み続けているのかが私には感じられたため、私の声かけは自然と穏やかになっていました。C児は私の声かけから自分の思いをわかってもらえた安心感を抱いていたように感じました。

子どもの思いに向き合うことについて先生方と一緒に考えられたらと思います。



■子どもが自らこだわって追究する姿を支える社会科の教師を目指して

北沢 賢悟 (塩尻市立丘中学校)



私は、私自身の社会科への思いや考えを基に、授業づくりをすすめてきました。その中で、A生の「何もできない」という訴えや、3年生の「つまらない」というつぶやきに出会いました。授業を振り返ると、自らの気になることを、友と楽しんで追究したかったA生の姿がみえてきました。私は、子どもがどのように追究を深めているのか知りたいと思い、実習に向かいました。そこでは、自らの生活の中で気になることを、友と一緒に楽しみながら考え合うB生やC生に出会いました。私は、子どもが気になることを基に、社会的事象にこだわりをもって追究する姿を支える授業を目指したいと考え、2年次研究に向かいました。

しかし、歴史的分野における導入の単元の授業で、D生は「無理っ!」と言いました。私は、私自身の歴史学習への思い入れが拭い去れていないと改めて思いました。単元を再構想し、その時代を象徴する絵を見比べる活動を行った際、E生は「何がどうやってできているのか」という見方にこだわって歴史的な事象を考え、周りの友と一緒に、社会や時代の移り変わりをとらえようとしていました。

私は先生方と、その子なりの見方が生きる授業づくりについて、考え合いたいと思います。

第2分科会

■その子のよさを実感し、行為に込められた思いに寄り添える教師

畠山 哲 (長野市立吉田小学校)

反発を繰り返していたA生は、私との約束だった給食当番を行うために、誰よりも早く教室に戻って来ました。配膳台の提出ノートに気がつく、全員分を配る気遣いまでしていました。教室でA生を待っていた私は、嬉しくなりました。私は、ほんの小さな出来事がきっかけで、A生によさを感じ、歩み寄りたくなっていた自分に気がきました。私は、その子から感じるよさや思いを受け止め、私もその子の思いを考え続けたいと2年次研究に入りました。

1学期始業式翌日の自己紹介で、「算数の時間は教室を飛び出す」と公言するC児に出会いました。しかし、家庭科でのC児は、私のアドバイスに目を丸くして受け入れ、手を叩いて喜びました。「ありがとうございます」とお礼を言うと夢中になって練習を始めました。「できた。見て先生!」という姿には、喜びが溢れていました。私は、時折見せるC児の素直さに惹かれています。手応えを感じ、嬉しさや楽しさを表現しているように感じられ、見ている私も嬉しくなるのです。

その子と共に生活する中で気づく、その子の行為に込められた思いやキラリと輝くその子のよさを感じることに一緒に考えられたらと思います。



■子どもが自ら学ぼうとする姿に目を向け、共に追究する教師

高橋 美嘉 (佐久市立泉小学校)



私は、活動が止まっている子どもがいると困っているのだと思い、私が支援してあげなければと思っていました。算数の時間に頭を抱えて考えていたB児を、私は答えがわからず困っているのだと思っていました。しかしB児は、自分なりに納得のいく答えを求めるにはどうしたらよいかと考えていました。道徳の授業で最後まで迷っていたC児の姿を振り返り、私はC児が建前ではなくもっと本音で語り合いと願っていたことに気づきました。

2年次に出会ったD児は、道徳の授業で登場人物に気持ちを寄せ、叙述には書かれていない思いについても想像して追究を深めていました。D児の姿をみた私は、D児に追究を任せたくなり、私だけだと考え、D児の発言を聞いて思わずジェスチャーで表していました。

私は、子どもの思いに目を向けたいと思い、子どもを信じ子どもと一緒に考え合いたいと思えるようになりました。子ども自身が考えてみたいと思えるような教師のかかわり方について考えていきたいと思っています。

第3分科会

■子どもの求めていることを感じ、追究を支える教師を目指して

前田 全俊 (佐久市立岸野小学校)

私は、教師の考えた活動や手立てにそって学ばせることで、子どもにより多くの知識や技能を身につけさせたいと思っていました。しかし、振り返りを通して、子どもは、決められたことではなく、自らが学んでいきたいのだと訴えていたことに気がきました。私は、子どもの願いを大事にしたいと思い、子どもが学びの中で何を願っているのかを知るために実習へ向かいました。C児は、『おかゆのおなべ』というお話を読んで、おかゆが溢れる大変さを何とかして私に伝えたいと願っていました。しかし、私はC児の何としても伝えたいという切実な思いを受け止めることはできませんでした。実習を通して私は、子どものそのときの思いや感動と一緒に感じたいと思うようになりました。



2年次研修で出会ったD児は、あさがおの種に名前を付け、自分の手で大事に育てたいと願っていました。「先生もやってみれば」とD児に言われた私は、同じように種を温めたことをきっかけに、子どもと共に活動する意味を考え直しました。私は、D児が見ている世界を感じ、思いを支えられるようになりたいと思うようになりました。

■子ども一人一人の「わかりたい」に目を向けられる授業を目指して

馬場かおり (佐久市立岩村田小学校)



私は、私が子どもにとってわかりやすい授業をすることが、子どもが主となる授業につながると思っていました。しかし、A児の言葉をきっかけに、私は子どもにとって「わかる」とはどういうことなのかに目を向けてこなかったのではないかと思います。子どもはどう学びたがっていたのかを知りたいと授業の振り返りを始めました。

B児は、重さを表す単位の学習で、生活の中の身近なものに関連させながら単位の意味や価値を考えようとしていました。C児は、4cmの図形を方眼紙にかく場面で、私の予想した4つのマスを組み合わせた図形でなく、斜線を使った図形に挑戦していました。E児は、悩みながらも自分にとってわかりやすい見方で多角形の内角の和を確かめていきました。子どもは、その子なりに学ぶ価値を感じ、自分なりの追究で「わかった」にたどり着きたいと願っていました。私は、子どもに追究を任せながら、子どもがどう考えているのかを「その子になって」考え続け支えたいと思いました。

子どもの「わかりたい」姿について、先生方と語り合えたらと思います。

参加者の声

(令和3年度研究発表会参加者)

私は生徒を「困った生徒、やっかいな生徒」としておわらせていないか。自分の弱いところをつかまれる思いで学ばせていただきました。

子どもの言葉にならない訴えに耳を傾けるために、自分のプライドや見栄よりも、子どもが何を受け取っているかという目線を大切にしていきたいと感じました。

(初任者研修で参加の先生)

発表の途中でVTRの映像が流れたり写真が提示されたりして、とても分かりやすいと思いました。

若い先生からベテランの先生まで、率直な意見が交わられて、子どもを見つめ直す大変により機会となりました。

(キャリアアップ研修で参加の先生)

授業ってやっぱり子どもと先生でつくった方がイキイキとして楽しいだろうなと思いました。そんな教室なら「また明日も学校に行きたい」と思えると思います。

(一般参加の先生)



信濃教育会教育研究所の研究発表会は、令和4年度指定研修対象者の研修対象となります。